

III. 資 料

1 アンケート質問項目（研究A、研究B）

1) 研究A アンケート項目

研究A「発達障害の可能性のある子どもの保護者支援に関する調査（保護者対象）」で使用した調査項目を掲載する。なお、本調査はWeb調査であった為、画像を掲載する。

0. お住いの地域を選択してください

佐賀地区（佐賀市、小城市、多久市）
 唐津地区（唐津市、玄海町）
 伊万里地区（伊万里市、有田町）
 杵藤地区（武雄市、嬉野市、鹿島市、大町町、江北町、白石町、太良町）
 東部地区（神埼市、鳥栖市、吉野ヶ里町、上峰町、みやき町、基山町）

1. お子さんの診断名は何ですか？（複数選択可）。

自閉症スペクトラム
 A D H D
 学習障害（L D）
 知的障害
 肢体不自由（重度心身障害を含む）
 視覚障害
 聴覚障害
 病弱・身体虚弱
 診断は受けていない
 その他: _____

2. 就学前にお子さんのことについて相談できるところはありましたか？

あった
 なかった
 よくわからない（相談は必要なかった）

2で「あった」と回答した場合

3. 「2」で相談できる場所が「あった」と回答した方にお尋ねします。主にどこへ相談していましたか？（複数選択可）

- 病院
- 保育園・幼稚園・認定こども園
- 療育センター等の専門機関
- NPOなどの民間機関
- 行政機関（市役所等）
- 大字
- 親の会
- その他: _____

4. 相談相手を教えてください（複数選択可）。

- 医師（小児科）
- 医師（小児科以外）
- 幼稚園教諭、保育士
- 保健師（看護師を含む）
- リハビリ専門職（PT, OT, STなど）
- 社会福祉士（相談員など）
- 行政機関の担当者
- 小学校の教員
- 特別支援学校の教員
- 大学の教員
- 親の会の保護者
- その他: _____

5. 相談先（相談相手も含む）には気軽に相談できましたか？

1 2 3 4 5

まったく気軽ではなかった ○ ○ ○ ○ ○ とても気軽だった

2で「なかった」と回答した場合

6. 「2」で「なかった」と回答した方にお尋ねします。なぜ相談できる場所がなかったのですか？

- 相談できる場所を知らなかった
- 相談できる場所は知っていたが、時間がなかった
- 相談できる場所は知っていたが、行きづらかった
- その他: _____

共通セクション

7. 就学前に保育園や幼稚園でお子さんの個別の支援計画（指導計画）はありましたか？

- あった
- なかった
- よくわからない

7で「あった」と回答した場合

8. 個別の支援計画（指導計画）があった方にお尋ねします。支援計画の内容を園などと共有できていると感じましたか？

- 十分に共有できていたと思う
- 共有できていたと思う
- あまり共有できていなかったと思う
- 共有できていなかったと思う

共通セクション 2

9. 保護者と保育者との間で、子どもの特性や困り感の捉え方について違いを感じることはありましたか？

1 2 3 4 5

まったく違いは感じなかった とても違いを感じた

10. 通っていた園で保護者への相談窓口やサポートはあったと感じましたか？

1 2 3 4 5

まったくなかったと思う とてもあったと思う

11. 進路選択（就学）にあたり、その前に役立ったサポートはなんですか？

- 園の先生からのアドバイス
- 園以外の専門機関からのアドバイス
- 先輩保護者からのアドバイス
- その他: _____

12. 進路（就学先）が決まった後に、保幼小の接続は円滑にいったと思いますか？

1 2 3 4 5

まったく円滑でなかったと思う とても円滑だったと思う

1 3. 接続について比較的円滑だったと思う方にお尋ねします。接続が円滑だった理由を教えてください。

回答を入力

1 4. 保護者支援・相談について何かご意見がありましたら、お願いいいたします。

回答を入力

戻る

送信



6/6 ページ

2) 研究B アンケート項目

研究B「発達障害の可能性のある子どもの保護者支援に関する調査（幼児教育・保育関連事業所対象）」で使用した質問紙を掲載する。

回答用紙

発達障害の可能性のある子どもの保護者支援に関する調査

※本調査の「発達障害の可能性のある子ども」とは、発達障害の疑いがあると思われる子ども、あるいは、すでに発達障害の診断のある子どもを指しています。

1. 貴園(事業所)についてお尋ねします。該当する箇所に○を付けてください。また、記入欄には数字をご記入ください。

1)施設の種類	保育所	幼稚園	認定こども園
2)入所・入園定員数	名		
3)教職員数	名		

4)所在地

佐賀市	唐津市	鳥栖市	多久市	伊万里市	武雄市
鹿島市	小城市	嬉野市	神埼市	吉野ヶ里町	基山町
上峰町	みやき町	玄海町	有田町	大町町	江北町
白石町	太良町				

2. ご回答いただく方についてお尋ねします。

- 1) 記入者の職務 ((例)主任保育士)

年 ケ月

3. 現在、貴園(事業所)に発達障害の可能性のある子どもはいますか？

現在在籍している	過去に在籍していた	これまで在籍していない
----------	-----------	-------------

4. 貴園において保護者支援で対応に苦慮したことはありますか。これ以降、「発達障害の可能性のある子の保護者」を『保護者』と略します。

ない	あまりない	よくある	頻繁にある
----	-------	------	-------

5. 園内の発達障害の可能性のある子どもへの「支援体制」についてお尋ねします。

- 1) 園内にコーディネーターは設置されていますか。

①設置されている ②設置されていない ③その他 ()

1 ページ

回答用紙

2) 園内の支援体制においてコーディネーターは機能していますか。

- ①十分に機能している ②機能している ③あまり機能していない ④機能していない

3) 個別支援計画を立てていますか

- ① はい ② いいえ ③ 不明

4) 3)で「はい」と回答した方にお尋ねします。発達障害の可能性のある子どもについて、園内で個別支援計画をもとに対応していますか。

- ①十分に対応している ②対応している ③あまり対応できていない ④対応できていない

5) 個別支援計画は、保護者と共有できていると感じていますか。

- ①十分にできていると思う ②できていると思う ③あまりできていないと思う ④できていないと思う

6) 担当クラスに発達障害の可能性のある子どもが在籍した場合、園全体で保護者を支援できる体制が整っていますか。

- ①十分に整っている ②だいたい整っている ③あまり整っていない ④整っていない

7) 担任が課題を把握してから、園全体で共有するための園内の相談システム(流れ)はどのようにになっていますか。自由にお答えください。

(自由記入欄)

6. 外部機関との連携についてお尋ねします。

1) 発達障害の可能性のある子どもを担当し、外部機関と連携したことがありますか。

- ① ある ② ない ③ その他()

2) 外部機関との連携を行うケース(必要であると感じるケース)の場合、どのようなことに難しさを感じますか。あてはまるもの全てに○をつけてください(複数選択可)。

- ① 連携が必要であるかの判断 ② 連携すべき機関がどこか ③ 連携後の園としての対応

- ④ 保護者への説明 ⑤ その他()

3) 子どもの就学時の情報に加え、その保護者に関する情報を小学校に引き継いでいますか。

- ① はい ② いいえ ③ 分からない

4) 園で取り組んだ保護者に対する支援がある場合、どのように小学校に引き継ぎましたか。

- ① () ② 特になし

回答用紙

7. 保護者支援の実際についてお尋ねします。

1) 発達障害の可能性のある子どもを担当し、その保護者(子どもの特性に気づいていない方を含む)に園での様子を伝える際、どのようなことに配慮していますか。

2) 保育者と保護者との間で、子どもの特性や困り感の捉え方について違いを感じることはありますか。

① 感じない ② あまり感じない ③ よく感じる ④ 頻繁に感じる

3) 2) で③④と回答した方のみへお尋ねします。「違いを感じた」具体的な内容をご記入ください。

8. 保護者からの「保育に関する要望」にどのように対応していますか。もっとも頻度の高い対応方法1つを選んで回答ください。

- ① 保護者の要望を積極的に聞くようにしている(保育者が積極的に尋ねる)
② 保護者からの要望があった場合は聞くようにしている
③ 保護者と園とで話し合い、互いが受け入れられる方法を探る
④ 園で可能な対応を伝え理解してもらう
⑤ その他()

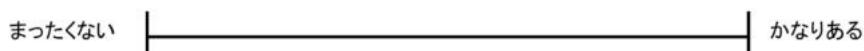
9. 以下のア)～オ)について、あなたが感じている程度を直線の左右両端に示した間隔を参考に直線状に「ノ」で示してください。

例) 予防接種でどの程度痛みを感じますか。

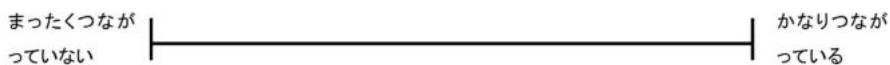


回答用紙

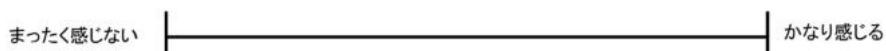
ア) 発達障害の可能性のある子どもとの関わりにどの程度、充実感がありますか。



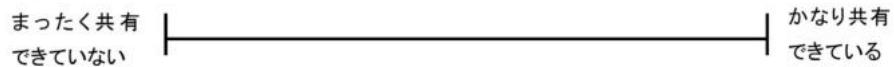
イ) 発達障害の可能性のある子どもとの関わりが保育者としての成長にどの程度つながっていますか。



ウ) 保護者支援にやりがいを感じますか。



エ) 発達障害の可能性のある子どもの育ちをその保護者とどのくらい共有できていると感じますか。



オ) 保護者支援において周囲からのサポートを感じますか。



10. 保護者支援を充実させるためには何が必要だと思いますか。

(自由記入欄)

11. 保護者の障害受容(保護者と協力しながら子どもの支援を行えるようになるまでの過程)に寄り添う難しさについて、もし差支えなければ、ご意見をお聞かせください。

(自由記入欄)

以上で質問はすべて終了です。ご協力ありがとうございました。

本回答用紙を同封の返信用封筒にて返信ください。

令和元年 12月 25日締切(当日消印有効)

4 ページ

2 研修会等報告

1) 平成29年度 先進地視察報告

日 時：平成30年2月15日（木）、16日（金）

視察者：川邊浩史准教授（幼児保育学科 プランディング事業代表者）、

西岡征子准教授（地域生活支援学科食支援コース、2/15のみ参加）、武富和美准教授（地域生活支援学科食支援コース）、馬場由美子准教授（地域生活支援学科福祉生活支援コース）、立川かおり講師（地域生活支援学科福祉生活支援コース）、津上佳奈美助教（幼児保育学科）

【広島市西部こども療育センター】

目的：発達障害児にみられる偏食の改善に対し、管理栄養士を中心に、給食メニューの工夫や保護者への指導、食行動のサポートなどに積極的に取り組まれ、食支援の実績が豊富な施設を訪問し、主に、研究B・Cグループの研究計画の参考にする。

1. 園長（小川裕子先生）による概要説明

■ 外来診療部門

小児科、精神神経科、整形外科の3つの診療科があり、PT,OT,STによる発達訓練・指導や心理検査も行われている。また、発達に遅れがあるか、その疑いがある乳幼児とその保護者には、外来療育教室において治療的指導・支援や生活指導等が行われている（集団、個別）。

■ 地域支援部門

知的障害児・身体障害児、またはその疑いのある乳幼児とその保護者、関係者に対して発達・福祉相談を行っており、ケースによっては、保育園等の施設支援、在宅訪問による相談、各専門機関との連絡・調整などを行うこともある。

■ 通園施設部門「なぎさ園」

知的障害児支援：集団生活の中で様々な活動を体験することで、基本的生活習慣や社会性が身につくような療育が行われる。

運動機能障害児支援：保護者と一緒に専門的な支援を受けながら集団生活の中で様々な活動を体験し、運動機能の促進、基本的生活習慣や社会性の獲得を目指す。

- ・ スタッフは、子ども2人につき1人配置。
- ・ 毎日、給食提供が行われる。
- ・ 通所1年目は、約9か月間、保護者も一緒に登園し、子どもと共に過ごす。
- ・ 利用児は、通園前、発達・福祉相談から医師による診察を受け、その後、ICP会議の対象となる。ICP会議では、医師をはじめ各専門スタッフが同時に、対象の子どもとその保護者が遊んでいる様子を別室から観察し、それぞれの視点からの意見交換を行ったうえで、支援方針を決定する。



なぎさ園 園長 小川裕子 氏



説明会の様子

2. 施設見学（給食の様子）

児童発達支援センター「なぎさ園」の見学をさせて頂いた。また、園のご配慮により、食支援の参考になるよう、給食の様子をみせて頂くことができた。

- ・ どのクラスにおいても、楽しそうな雰囲気があり、「食べることを楽しむ」ことを大切にされていることが感じられた。
- ・ 給食中は、管理栄養士、調理師など、給食に携わっているスタッフ（給食先生）が子どもたちの様子を見て回り、食べ具合や子どもたちの感想を直接見聞きすることで、給食づくりの参考にするだけでなく、調理スタッフのモチベーション向上にも効果があるとの説明があった。
- ・ 自分で意思表示をする練習となるよう「おかわり」の機会を作るため、給食は少なめに盛り付けられている。「おかわり」の意思表示は子どもによって様々であり、タブレットやベルの使用等、言語以外のツールも用いられていた。
- ・ 食後のデザートは年長児が各クラスに運ぶ係となり、年中・年少クラスの職員は温かく迎え入れていた。役割を持つこと、また職員から褒められ、認められる機会につながっているとの説明があった。
- ・ 食事中、姿勢の保持が難しい子どもに対しては、様々な支援が工夫されていた。例えば、体幹の筋緊張が低下しているダウン症の子どもの場合は、足裏に適度な刺激が入るようにマットを置いていた。自然な状態で覚醒レベルを高めつつ、さらに踏みしめることにより体幹の筋緊張を高め姿勢を保持しながら食事するような工夫があった。
- ・ 苦手な食材に挑戦しようとする子どもに対して、支援するスタッフが温かく根気強く声掛けを続け、少し口に入れることができた時にはその喜びを共有し、優しく褒める姿が印象的であった。
- ・ それぞれの子どもの特性、性格をスタッフが細やかに把握され、本当の意味で個々に応じた支援が行われているという印象を持った。
- ・ 給食に保護者の方が付き添われているクラスも見学させていただいた。これまでのなぎさ園での実践から、保護者が給食時に食事介助をすると偏食改善が早く進むという印象があり、食支援を通して保護者が自覚持てるようなサポートを心掛けているとの説明を受けた。



給食時に使用するカード

3. 管理栄養士（藤井葉子先生）による偏食改善についての講義・試食

なぎさ園で開発された偏食対応食を試食させていただきながら、偏食改善のための食支援についてのお話を伺った。

【なぎさ園における通所児の実態】

- ・ 現在、通所児の半数以上に特別食を提供している。
- ・ 年長児クラスでは、特別食を食べている子どもはほぼいない。知的能力が高い子どもであれば、1年程度で偏食が改善する。

【偏食対応レシピ】

■ 「かりかり」…揚げ物を好む子どもの口腔感覚対応食として開発された。120度で長時間揚げて調理する。ダウン症の子どもが「かりかり」を1年程食べると、咀嚼がうまくなり、姿勢も良くなることがあるとの説明があった。

* 口腔感覚対応食とは、自閉症の子ども達が安心して様々な食材、メニューが食べられるように各々の子どもの口腔感覚や食べ方の特性にあわせた給食の提供食。



食材を、子どもの好みの触感・食感・味・色・匂い・温度に変えて提供し、感覚に合わせて徐々に普通食に近づくように変化させていく。例) 野菜を揚げる。苦手なカレーを春巻きの中に入れる。等

ピーマンや豆腐などを揚げたものを試食したが、どの食材も非常に美味しいだけた。野菜は苦みがなく、甘く感じられる。

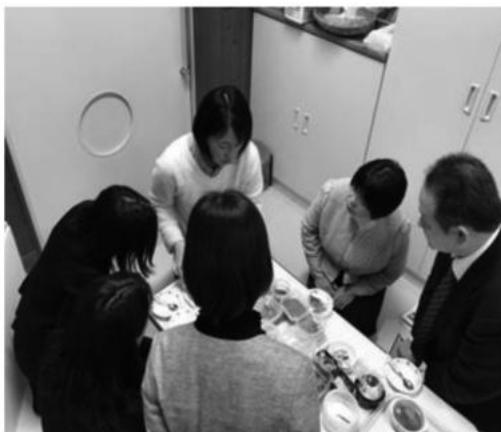
■ 形態で判断する子どもへの対応・・・繊切りや粒々など好みの形状で食べものを選ぶ子どもがいるため、切り方やこだわりを活かした好みの形態にして給食を提供するケースもある。

■ 食材の柔らかさ・・・子どもの咀嚼の状況によって、食材の柔らかさや形を変えて提供される。ここで重要なことは、ミキサー食であっても一品（全ての使用食材）をまとめてミキサーにかけるのではなく、それぞれの食材ごとにきれいに器に盛りつけて提供されること。

	<p>普通食。どのメニューも非常に美味しい。</p>
	<p>それぞれの食材を、普通食より少し柔らかくしたもの。硬いー柔らかいという 2通りではなく、いくつかの段階に分けて提供されている。</p>
	<p>各食材の最も柔らかい形状のもの。スープに使われている椎茸も細かく刻まれていたが、独特の香りが強くなることはなく、美味しくいただける味付けがされていた。左上は、鮭をすり潰したものであるが、潰したままではなく魚の形が作られている。こんにゃくはムース状になっているが、しっかりとこんにゃくの味が残っている。</p>
	<p>白米については、他の施設では、よく軟飯が用いられているが、軟らかくまとまりがないため丸のみしてしまう。なぎさ園では、白米を一度すり潰したものをおにぎりにして提供しよく噛んで食べるように促している。また、おにぎりの形状は細長くすることで食べやすく噛みやすいように工夫している。</p>



食物が口に入った際に舌ですりつぶすようにしてすぐに飲み込んでしまうことがある。その場合消化不良を起こしやすく、さらに味わうことが難しくなる。そこでガーゼによる咀嚼訓練を行い、意図的に食物を口の中にとどめて咀嚼を促す。ある程度咀嚼が進んだ後にガーゼを外し、包んでいたものを再度口中に戻す。そうして段階的に咀嚼、嚥下を経験的に覚えることができる。



熱心にご指導くださる管理栄養士の藤井先生



ガーゼを用いた咀嚼の体験（西岡准教授）



藤井先生との記念撮影（エントランスにて）



広島市西部こども療育センター玄関前

【広島市立広島特別支援学校】

目的:全国的に大規模である特別支援学校の施設とその機能を視察することで発達相談部門の機能、給食の提供方法の工夫、またスヌーズレン・ルームの活用方法やその効果について伺い、本研究の参考とする。

1. 中尾秀行校長先生、西山美香による概要説明

広島市立広島特別支援学校は、関係者の長年の思いが込められた様々な設備を備える校舎が85億円を投じて建設され、平成24年9月に移転し開校された。現在、516名の児童生徒が通学している。知的障害のある児童生徒が対象となるが、障害が重複しているケースは2割程度ある。そのため、医療的ケアを要する児童生徒に対応するため、看護師5名も配置されている。

現在の校舎建設に至るまでは、様々なご苦労があられ、校長先生と教頭先生は、当時、教育委員会において深くその計画・建設に携わってこられた。例えば、靴のサイズが大きい生徒もいるため、児童生徒用の下駄箱は特注で設置されたり、車椅子を利用する児童生徒が過ごしやすいよう最低基準よりも広く廊下の幅を設定したりと、児童生徒が少しでも気持ちよく過ごせるようにとの想いが込められていた。

2. 河村裕子栄養教諭による給食に関する説明

研究Cの参考のため、栄養教諭から、給食の実態や工夫についてお話を伺った。

- ・ 広島特別支援学校では、広島市内の公立学校と同じメニューが導入されている。そのため、ペースト状で提供する必要がある児童生徒への対応が非常に難しく、使用される食材によっては苦労することがある。
- ・ 入学時、使用する食器などについて保護者と細やかな打ち合わせが行われている。
- ・ すくいやすさ、飲み込みやすさ等を検討し、児童生徒に応じた形態の食器を保護者が選び、給食の様子を日々観察しながら、状況に応じて変化させることもある。
- ・ 食器の下には滑り止めシートを敷いて給食を食べる児童生徒もいる。
- ・ エジソン箸を希望する児童生徒は家庭から持ってきて使っている。
- ・ とろみ剤は様々なものがあるため慎重に検討し、給食室のものを使用するか、家庭から持参するかは栄養教諭と保護者で話し合いの上決めている。実際にとろみをつけるのは、各担任が行っている。



校長先生、教頭先生、栄養教諭から、給食についての説明を受けている。給食のメニュー表や、学校で準備することのできる食器を実際に見せて頂いた。(校長室にて)

3. 施設見学（西山教頭先生）



広島県出身の画家が広島特別支援学校のためにデザインし、壁画にしたもの。画家自身も障害があり、車椅子で生活をしている。エントランスホールに飾られている。

ひかりの広場：吹き抜けの天井は高く、たくさんの窓から光が入るように設計されている。右上（2階部分）はプレイルームになっており、児童生徒の賑やかな声が響き渡っていた。



体育館：天井が高く開放的な作り。壁には丸い形の穴がいくつも開いており、そこには児童生徒の作品を展示することができる。毎年、卒業生に向けて在校生が制作している。

体育館：ステージは低く作られており、緩やかなスロープを使って上がるようになっている。ステージの奥行きも広く設計されている。

	
<p>屋内プール:障害のある児童生徒が安心してプールに入れるような施設がなかなかないため、当時教育委員会で計画に携わっていた校長先生の強い希望で実現した。急な予定変更が苦手な児童生徒も多いため、天候の影響を受けることがないこともメリット。</p>	<p>サポートセンター:在籍していない子どもやその保護者の支援、学校関係者への支援、研修協力等の目的で設置されているが、教育相談員2名で年間600件に対応しているため、課題も多い。</p>
	
<p>作業室:自分たちで選んだ布を使って、バッグなどを製作している。</p>	<p>クリーニング実習室前:高等部職業コースの生徒が行うクリーニングサービス。1枚50円で利用することができ、教職員にも好評のこと。</p>
<p>■ 高等部普通科職業コース</p> <p>このコースでは、1年次には月曜日と火曜日、2年次と3年次では木曜日と金曜日に作業学習が行われている。作業学習は、フードサービス（パン製造など）、クリーニングサービス、ビルメンテナンスサービスの3種目があり、1年次ではすべて経験し、3年次にはいずれか1種目を選んで応用力を高めるような指導が行われている。また、校内には接客・販売実習室もあり、接客などを学ぶことができるようなカリキュラムが作られている。広島市では接客技能検定を行い、清掃などの実技試験などがある。</p> <p>実際に、私たちが訪問した時には、校舎内の廊下を黙々ときれいに清掃する生徒や、食品加工室でパンを製造している生徒がおり、挨拶などのビジネスマナーの習得・向上にも取り組まれていることが窺えた。</p>	



そらの広場：屋上はウッドデッキ調で整備され、児童生徒が安心して活動できるような配慮もされている。奥に見える似島には似島学園（児童養護施設と福祉型障害児入所施設）があり、入所児が数名本校に通学している。



案内してくださった教頭先生（右から3番目）との記念写真（屋上広場）。

■ スヌーズレン・ルーム

広島特別支援学校には、2部屋のスヌーズレン・ルームが設置されている。心地よい感覚刺激（光・音楽・触感・香りなど）を提供し、それらを楽しみながらリラックスできる空間で、障害のある児童生徒ができるだけ感じ取りやすく、楽しみやすく、リラックスしやすいように室内が整備されている。



● 「動」的な機能のスヌーズレン

多動傾向のある児童生徒の情緒が、安定、回復するとともに、過敏性や特定のものへのこだわりを和らげ、いろいろなものへの興味・関心を広げたり、複数人数が同時にすることで、コミュニケーション能力の向上を図ったりすることを目的とされている。

（ボールプール、聴覚・触覚ウォールパネル、ミュージカルスクエア、ボックスドラム）



● 「静」的な機能のスヌーズレン

自閉的傾向のある児童生徒の多動傾向を低減させ、心身共にリラックスしたり、重度・重複障害のある児童生徒がリラックスして視覚的、聴覚的、触覚、臭覚などの刺激を受けることで、自発的な活動や自身の主体性を向上させたりすることを目的とされている。

(ウォーターベッド、インターパーティ・バブル・ユニット、サイド・グロウ、プロジェクター)

■ 校長先生からのご助言

- ・保護者が支援を求めた時、相談に行きたい時に、そのタイミングで行ける場所、頼れる場所が必要ではないだろうか。保護者が求めるタイミングに応じることが重要であると考える。
- ・障害のある子どもをもつ保護者は大きなストレスを抱えていることが多い。残念ながら、夫婦間に考え方のズレが生じ、協力して子どもを支えることが難しく、離婚に至ってしまうケースにも出会う。そうなった場合、ひとり親家庭となり、さらなるサポートが必要となる。何とか支援者としてできることはないかと常々感じている。
- ・地域全体で支えていくという視点も忘れてはならない。

【視察全体の所感】

発達障害児の二次障害予防のためには、発達障害の特性に応じた環境を整えること、その子どもや保護者への周囲の理解が深まることが非常に重要である。広島市西部こども療育センター「なぎさ園」では、子どもを想う現場の先生方の声から開発・実践してきた偏食対応レシピや食支援を知り、また、見学時にはスタッフの方々の子どもたちへのかかわりの様子から、子どもへの愛情を感じる場面に多く出会うことができた。広島特別支援学校では、子どもたちの幸せを願う現場の先生方の長年の想いが実現した、素晴らしい設備を見せて頂くことができた。今回の視察では、障害児が安心・安全に過ごせるような環境の在り方、食支援や保護者との連携におけるスキルを学ぶことができたが、何より、現場の先生方の姿から、子どもへの真の愛情とは何かについて考えさせられ、子ども達、その保護者、そして地域に還元できるような心ある研究を行わなければならないということを改めて感じた。

(文責 西岡、武富、馬場、立川、津上、川邊)

2) 平成29年度 学内研修会報告

日 時：平成30年3月14日（水） 13時30分～15時00分

場 所：西九州大学佐賀キャンパス 5309教室

講 師：園田 貴章 先生（久留米大学人間健康学部 教授）

テーマ：発達障害の理解と支援

(1) 学内研修会の目的

今回、選定された本学の研究プランディング事業は「発達障害の二次障害予防」が主題となっている。しかしながら、本学のすべての学科が直接発達障害に関与してきたというわけではない。その為、二次障害予防を考える前に全学的に発達障害の障害特性を共通で認識しておく必要があった。そこで、発達障害に対する理解、啓発を目的とした学内研修会を開催した。

(2) 参加者

地域生活支援学科 教員 8名

幼児保育学科 教職員 6名

子ども学部心理カウンセリング学科 教員 1名

地域看護研究研修センター 教員 1名

佐賀キャンパス事務局 職員 5名

(3) 研修の概要

研修会の前半では、園田先生の小学校時代のエピソードから始まり、発達障害に関する基本的な理解、そして二次障害の機序について説明があった。研修の後半では、LD学会の特別支援教育士のテキストを中心に模擬体験（演習）とグループワークが行われた。具体的には発達障害のある子どもが聴覚処理をする際に、どのように苦労しているか（どのような困難を感じているか）ということを体験した。同時に支援方法（配慮）をテーマにグループディスカッションを行い、教職員間で発達障害児の困り感の理解を深めた。

【前半の講義の様子】



【後半の疑似体験、グループワークの様子】



(4) アンケート結果

参加者から研修を受けた感想や学んだことについて自由記述で回答を得た。

発達障害について疑似体験ができたのが、とても勉強になりました。
模擬体験を通して、聞いて理解する事の難しさを感じました。授業をしていて、今回の体験のように学生も受け取っていたのではと痛感しました。ありがとうございました。
学生の気持ちを感じる事ができ、自分の授業の振り返りにもなりました。ありがとうございました。
発達障害の子どもが困っているようなことを疑似体験でき、子どもの気持ちが分かったような気がした。このような研修は初めてだったが、体験を通して支援を考えていく勉強会はよかったです。
発達障害に関する学習だけでなく、園田先生から本学ブランディング事業へのコメントを頂けたことが有り難かったです。貴重なご示唆を頂いたと思います。今後も是非、ご協力頂けると心強いです。
楽しかったです。
楽しい研修会でした。学びの多い内容だったと思います。
疑似体験を通して、学生の戸惑いなどを感じる事ができました。ありがとうございました。
とても分かりやすい研修会でした。まずは当事者の立場を具体的に理解することが大切だということを改めて実感しました。
私自身、発達障害の方と付き合う事が今までなく、どう向き合い理解すればいいのか分かりませんでしたが、今日の疑似体験を通してどういう対応が求められているかを、少しだけですが理解することが出来ました。とても良い研修会だったと思います。
疑似体験でお互いの気持ちを知る事が出来ました。相手に伝える事の難しさ、工夫が大切であることも気づかされました。ありがとうございました。

体験では、発達障害者とその人と関わる人の困り感を少しですが理解できたと思います。この困り感に 対してどのように解決すればよいのか考えるよい機会となりました。ありがとうございました。
疑似体験をすることで、学生や子ども達の気持ちが少し理解出来たような気がします。貴重なお時間あ りがとうございました。
演習を通して感じたのは、分かりやすく説明するためには、相手の状況（認知面、心理面、生活面など） をよく知り伝え方を工夫することが大切だと実感しました。ありがとうございました。
一度に沢山の事を言われると、こんなに理解出来ないのかと思いました。
疑似体験のある楽しく分かりやすい研修会でした。学生対応に少しでも活かせたらと思います。
とても分かりやすく、楽しい研修会でした。ありがとうございました。
このような研修会（ワークグループ）は初めてでしたが、子ども達の困り感が実感できました。知識だ けではなく、このような体験を通して困り感を知ることができたことが今後につながると思いました。 ありがとうございました。
本学のブランディング事業取組みに対し、テーマに合わせた研修会ならびに大変貴重な時間を頂きました。 これまで考えもしなかった事例に戸惑いながらも、それぞれの立場に立って考えさせられました。 この先の理解を深めるような研修会も継続して頂きたいです。

(文責 馬場、立川)

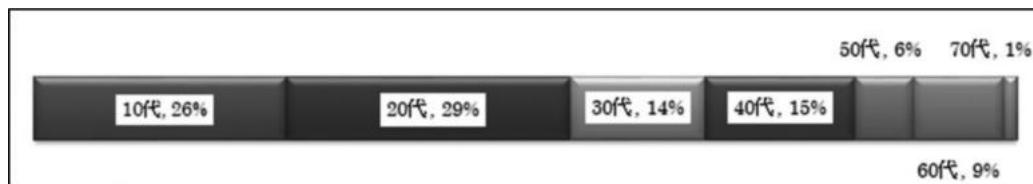
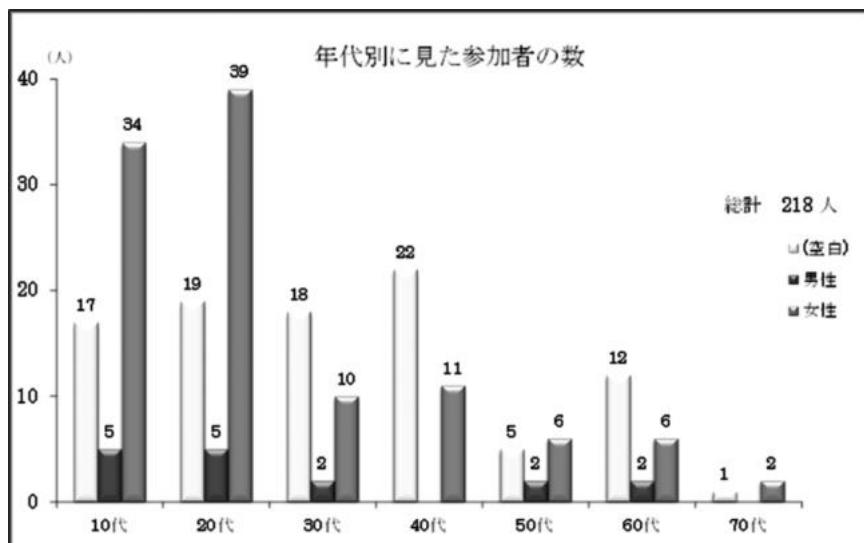
3 シンポジウム出口アンケート集計結果

1) キックオフシンポジウム

シンポジウム終了時に参加者へアンケートの協力を呼びかけ、224名から回答を得た（回収率76%）。アンケート項目は8項目となっており、そのうち1から7は選択式、8は自由記述とした。その結果を項目ごとに下記に示す。

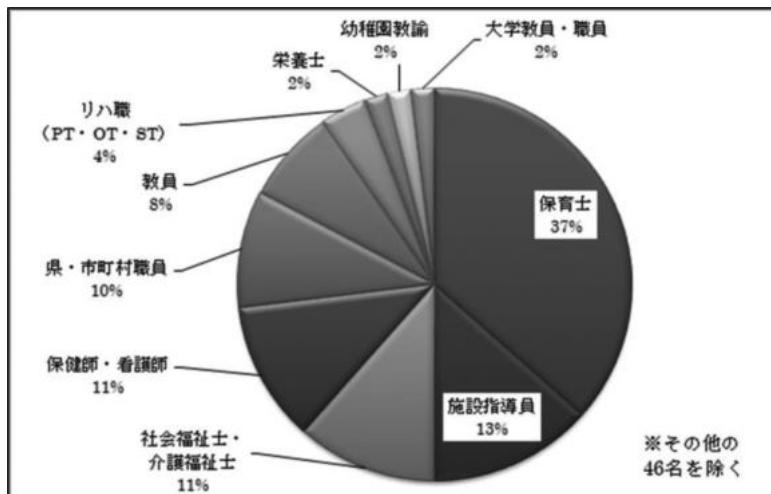
② 年齢・性別の分布

学生の参加が多かった為、10代と20代が多くなっている。一方、平日昼間の開催にも関わらず30代から40代の参加者もかなりの割合で参加している。一般参加者が比較的多かったことからシンポジウムのテーマへの関心が高いことが推測される。



③ 一般参加者の所属（職種等）

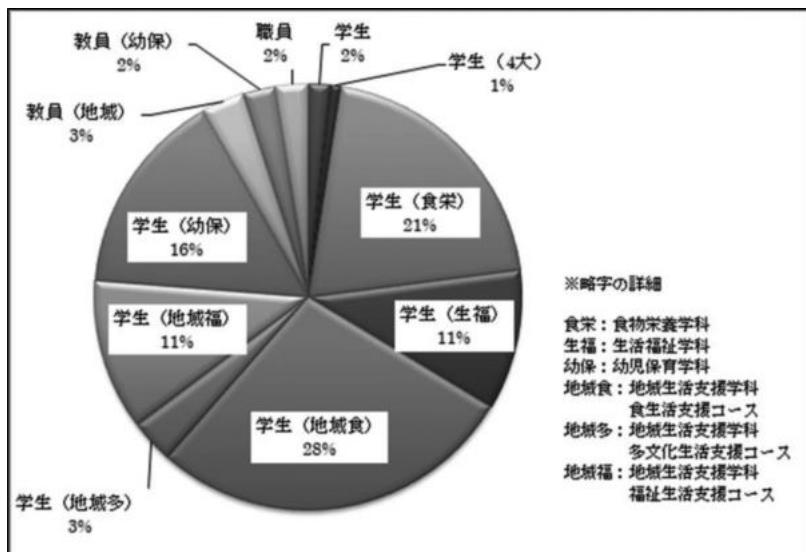
【一般参加】



「その他」46名中無記入を除いた31名の内訳 (() 内が人数)

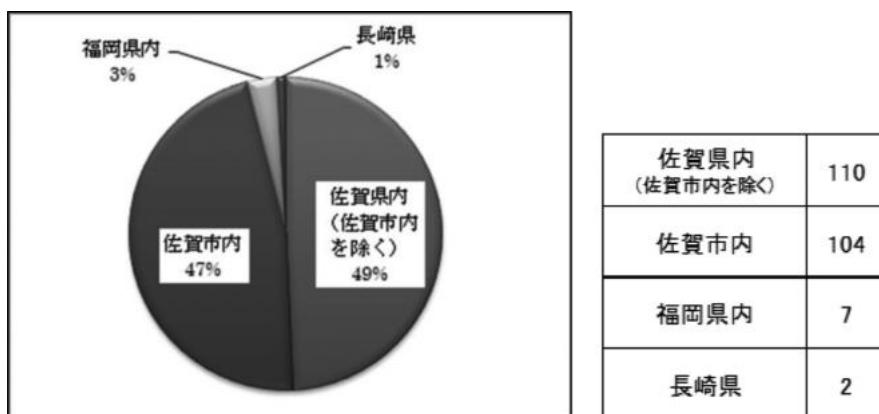
保護者 (9)、主婦 (6)、ボランティア支援員 (3)、みやき町手をつなぐ育成会事務局 (1)、三田川小学校特別支援ボランティア (1)、支援センター (1)、施設長 (1)、事務職 (1)、障害者就労支援員 (1)、障害者世話人 (1)、主任児童委員 (1)、非常勤5歳児コーディネーター (1)、母子推進員 民生委員 (1)、民生委員 (1)、臨床心理学専攻大学院生 (1)、会社員 (1)

【学内関係者】

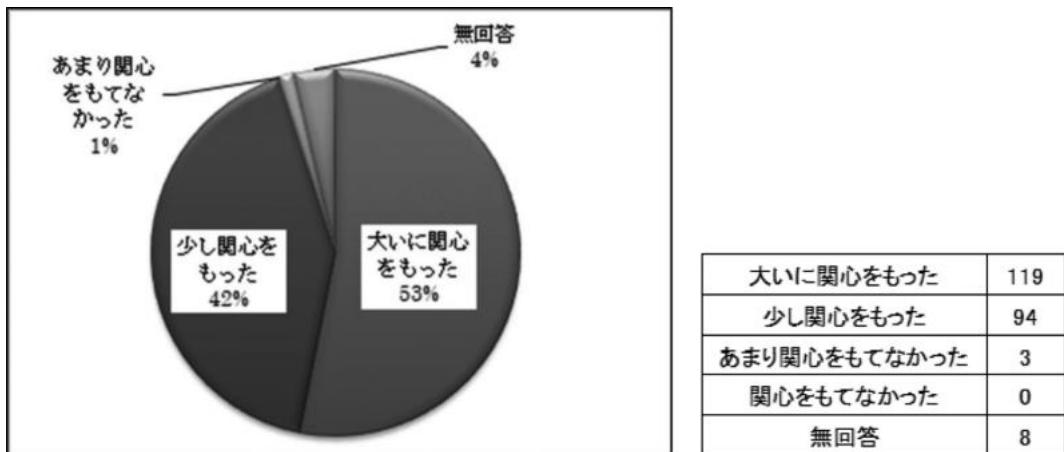


学生	学生(4大)	学生 (食栄)	学生 (生福)	学生 (地域食)	学生 (地域多)	学生 (地城福)	学生 (幼保)	教員 (地域)	教員 (幼保)	職員
2	1	25	13	34	4	14	19	4	3	3

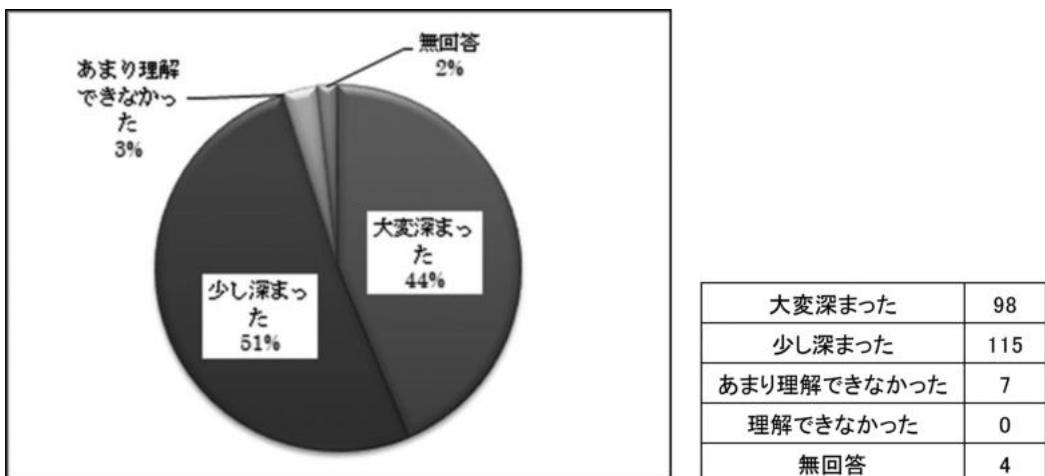
④ 参加地域



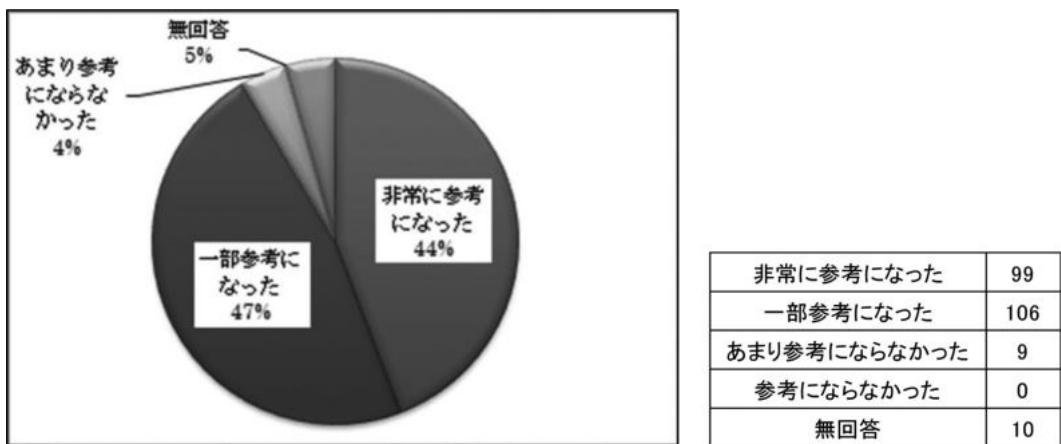
⑤ 本事業の研究内容への関心度



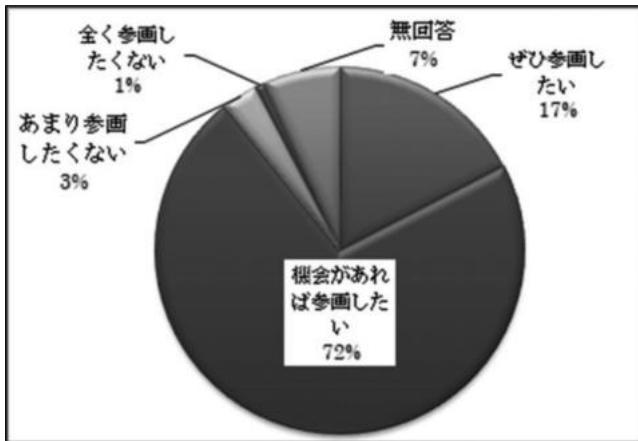
⑥ 当事者の体験談への理解度



⑦ ディスカッションの内容について



⑧ 本学研究ブランディング事業への参画（関心）



ぜひ参画したい	39
機会があれば参画したい	161
あまり参画したくない	7
全く参画したくない	2
無回答	15

⑨ 今回の「発達障害児の二次障害予防支援（あいあい）」についてのご意見・ご感想、プログラムに対するご質問・改善点、取り組んでほしいことなどございましたらご記入ください。

この設問については、自由記述を内容ごとに分類して、下記の項目に対応する内容を抽出した。さらに記述から今後の研究課題につながる可能性のあるものについてはコメントを加えた。

●シンポジウムに参加後の研究（取組）への関心度、参加協力等

啓発・広報に関する意見

- ・発達障害への正しい理解を促進してほしい。
- ・今後、研究を進めて新たな知見を示してほしい。
- ・講話などには今後も参加したい。（4件）
- ・発達障害に関する講話やイベントを増やしてほしい。

研究協力に関する意見

- ・意義ある取り組みで、何らかの形で協力したい。
- ・協働できることを示して欲しい（4件）

研究（取組）に連携やマネジメントを求める意見

- ・情報交換や支援方法を共有する場を設定してほしい。
- ・保幼小中高大の連携を強化して研究を進めてほしい。
- ・教育と福祉を深くつなげてほしい。
- ・研究が進み（社会的な）支援環境が整うことを期待する。
- ・「つながる為の」継続する支援方法を示してほしい。

○コメント

これらの記述から本研究に対する大きな期待が窺える。その為、上記課題に対する回答をこの5年間を通して情報発信していくことが研究事業の責務となることが分かる。しかしながら研究グループとしては、地域との連携は可能ではあるが、全体のマネジメントについては自治体を主体として本学としてはエビデンスを基にした情報提供が妥当であろう。

今後は、研究の手続きを踏まえ、他機関や自治体等との連携方法、情報発信の時期や方法についても再検討していく必要があると考える。

●シンポジウムを通した各研究に寄せる期待や要望等

研究A：（食）生活調査 研究グループ

- ・幼児教育等における早期発見の重要性
- ・支援者への情報提供
- ・研究結果の掲載先の確認（2件）
- ・シンポジウムや研修情報の提供

○コメント

内容は研究全体の記述と重複する箇所もあるが、研究Aは幼児教育・保育分野を主とした調査研究を実施する予定であり、その為調査後には学会発表、シンポジウムの開催といった研究成果を発信する責務がある。同時にHPによる発信の為の資料作成・配布なども重要となる。

研究B：保護者相談スキル 研究グループ

- ・子どもが成人した後の行き場所・居場所を知りたい。
- ・芸術面を伸ばしてくれるような場所を知りたい。
- ・関係者（支援者を含む）が相談できる場所があるとよい。
- ・障害を認めたがらない保護者への対応の重要性。
- ・発達障害を理解してもらう場がほしい。

○コメント

研究BのKGIは相談スキルの体系化と相談窓口の設置となっている。研究は調査から始まり、その後は保育相談や発達相談を主とした縦断的な研究となる。その為、5ヶ年は当然だが、その後もフォローアップではなく継続していくこととなる。記述からは発達障害児本人の困り感は当然だが、保護者、そして関係者の困り感への対応も求められている。まずは相談スキルという点に絞って、関係者の相談スキルアップに向けた取り組みが求められる。

研究C：食行動・食支援 研究グループ

- ・自宅でできる食の支援とは？
- ・食事で劣等感を抱き苦しんでいることを理解してほしい。
- ・子どもに応じた食の提供の難しさ。
- ・食以外の二次障害予防は？

○コメント

今回の研究プランディングの大きなテーマは食を通した家庭支援である。家庭支援の先に当事者ならびに保護者の心の安定、そこから派生する二次障害予防を見据えている。

記述の3つについては、今後の研究を推し進める中でクリアすべき課題である。4つ目の「食以外の二次障害予防」は一見別の課題のように見える。しかし、研究を進めていく中で、食を通して心の安定を図ることにより、二次障害予防に共通するキーセンテンスが得られることが想定される。おそらく、このセンテンスは食以外においても共通項となるであろう。つまり、今回は食を通して見つけ出すキーセンテンスだが、実はその他の生活場面においても応用できるのではないかと考える。

研究D：ストレス緩和ケア 研究グループ

- ・保護者の安心感が二次障害予防につながる。
- ・保護者のセラピーを受けてみたい。
- ・親のケアもしてほしい。
- ・ストレス緩和ケアの対象が10名は少ないのでは。
- ・保護者への心理的サポート活動の予定は？
- ・ペアレントトレーニングなどの実施予定は？

○コメント

研究Dはハンドマッサージやフットケアといったセラピーを中心とした実践的な研究である。KGIはセラピー効果の一般化である。研究としてセラピーを受けた後にも効果が生活内で継続することを想定している。その仮説として保護者の心の安定が子どもの心の安定に影響している。その為には、10事例程度を対象として縦断的に研究することが求められる。生理心理学的な実験の場合には30名程度の被験者を必要とするが、この場合には縦断的に実施する為に、数を増やすよりも継続して実施することが重要となる。そして記述にあるようにぜひ本研究に保護者へ参加いただけけるよう、2018年度で研究の基礎を固め準備する必要がある。

●今回の対談、ディスカッション、シンポジウム全体へのコメント（感想）

プラスの意見・感想

- | | |
|-------------------------------|---------------------|
| ・二次障害を知る機会となった（3件）。 | ・情報をもっと知りたい。 |
| ・講話をもう少し聴きたい（3件）。 | ・貴重な話を聞くことができた（5件）。 |
| ・専門的な内容が理解できた。 | ・よい学びの場となった。 |
| ・支援と家族ニーズとの隔たりを知った。 | ・発達障害を理解することができた。 |
| ・体験談に共感した。 | ・自身の支援の振り返りとなった。 |
| ・発達障害とその家族に対する支援の重要性を理解した。 | |
| ・参加して子どもの将来を見据えて支援に関わりたいと感じた。 | |

マイナスの意見・感想

- ・配布資料の確認不足と資料の不足。
- ・食と二次障害との関連が分からぬ。
- ・聴講している学生の態度が気になった。
- ・スクリーンの字が見えにくい。
- ・学校体制への批判カラーが出ていた。

○コメント

テーマへの関心の高さがうかがえる。多くの参加者が自身の体験と照らし合わせながら記述しているように感じられる。それだけ共感的に傾聴できる内容であったと言える。一方でマイナスの意見としては、手続き等のこともあるが、中には、「食と二次障害との関連性の不明瞭さ」「学校体制への批判カラーと受け取られていること」から全体進行についてはより密な打合せが必要だったと思われる。

●具体的な支援方法等に関する質問

- ・支援方法（事例を通じた）が知りたい。
- ・二次障害への対応が分からぬ。
- ・高校卒業後の支援について知りたい。
- ・障害児を引き付ける玩具や道具、遊びを知りたい。
- ・家庭で取り組めることの紹介をしてほしかった。
- ・対談で今後の支援の方向性を示してほしかった。
- ・ゲームばかりしている子どもからゲームを取り上げていいか？
- ・就学前の心理的不安（本人、保護者）への対応を知りたい。

○コメント

これらの質問については、公平性を保ちつつHP上で情報発信していく予定である。また、連絡先の明記されている質問については、担当者より個別に回答する。

●その他

- ・経済的な支援の必要性。
- ・障害者手帳の取得に関して知りたい。
- ・療育場所を増やしてほしい。
- ・大学の皆様、応援しています。
- ・子ども発達支援士資格の取得間口を広げてほしい。
- ・以前から西九大の学生さんの取組は素晴らしい。
- ・市町村すべてで今回の“あいあい”研究のような取り組みをしてほしい。
- ・みやき町の支援について町のHPに掲載してほしい。

2) 発達障害児の食支援を考える（2018シンポジウム）

シンポジウム終了時にアンケートは参加者全員に配布され、133名から回答があった。回収率は84%だった。

① 年齢・性別の分布

参加者の年代は30代が最も多くなっている（約32%）。また10代のうち2名は高校生であり、栄養関係の大学への進学を検討しており、今回のシンポジウムに关心を寄せて参加したこと。

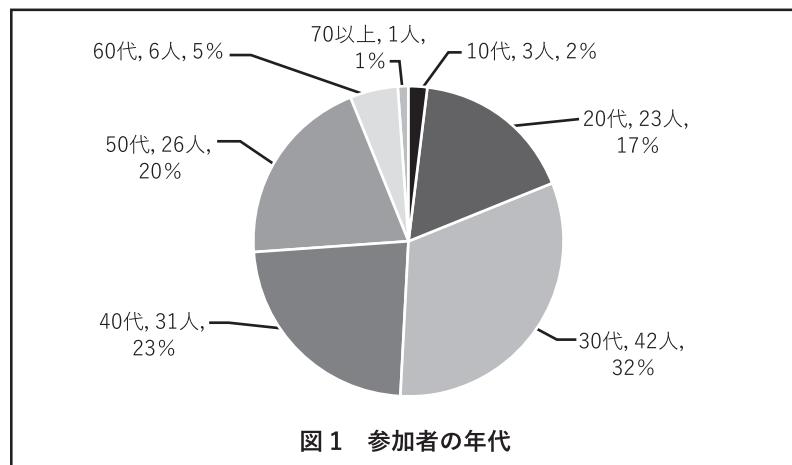


図1 参加者の年代

② 参加者の職種

シンポジウム参加者の職種は図2の通りである（133名中3名無回答）。参加数の保育士、管理栄養士・栄養士、保護者、幼稚園教諭の順で参加数が全体の70%を占めている。

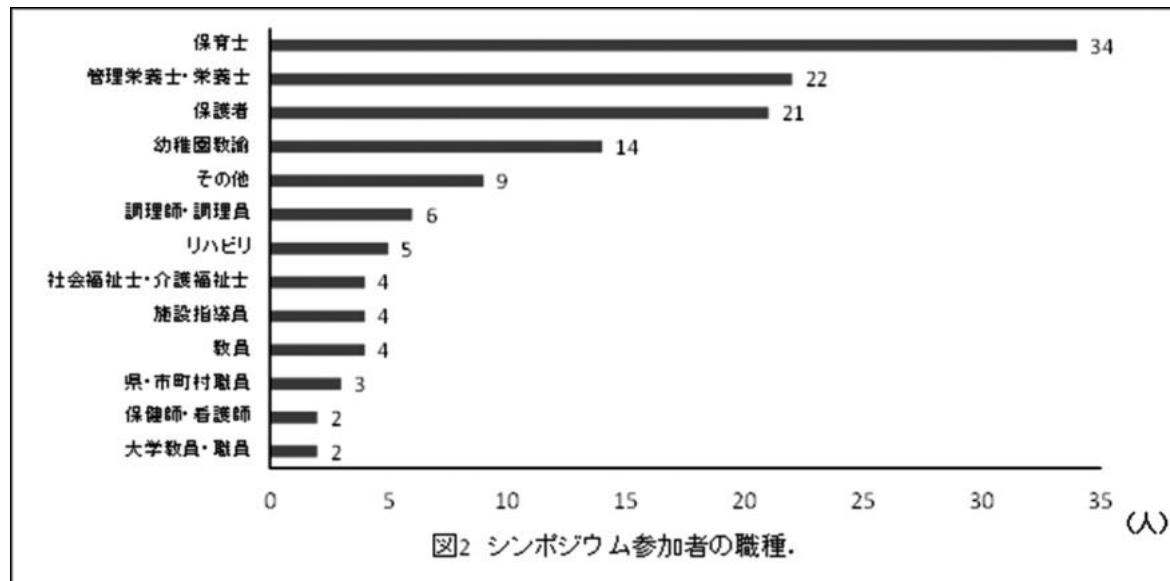
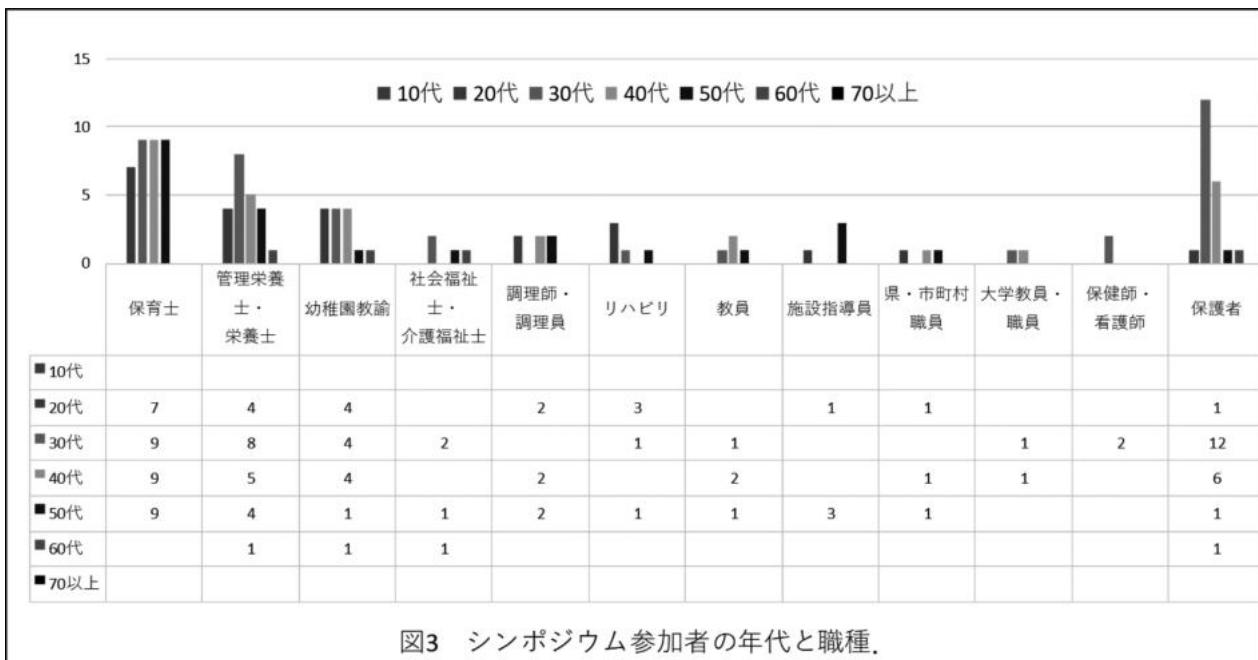


図2 シンポジウム参加者の職種。

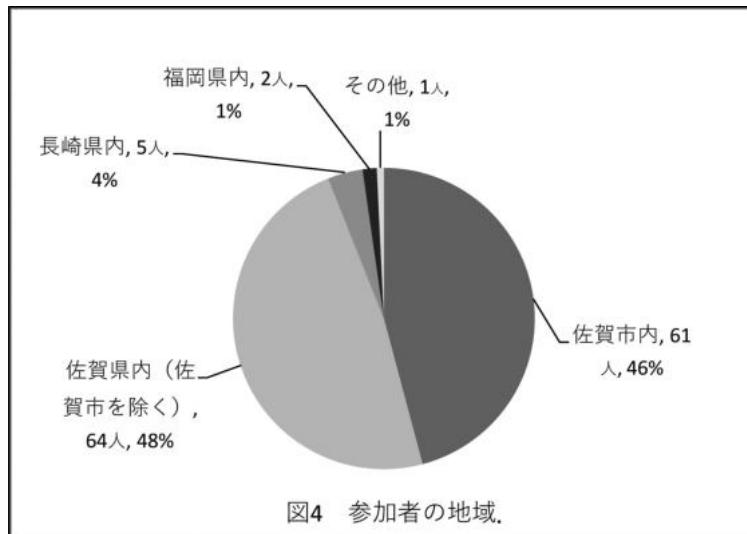
参加者の年代と職種のクロス集計

保育士や幼稚園教諭については各世代が参加しているのが分かる。管理栄養士・栄養士については30代が数名多く、現場を任されるようになった世代の参加がうかがえる（図3）。



③ 参加者の地域

参加者の多くは佐賀市内あるいは佐賀県内からの参加であった。その他の1人は熊本県からの参加者（卒業生）だった。長崎県から5人、福岡県から2人の参加があり、シンポジウムのテーマに関する関心度がうかがえる。



④ 本事業の研究内容（発達障害児の二次障害予防支援）への関心度（N=131）

本事業への関心度について回答を求めた。「大いに関心をもった」「少し関心をもった」「あまり関心をもてなかつた」「関心をもてなかつた」の4つの選択肢とした。その結果、100%の参加者が大なり小なり関心を持ったことが分かった。

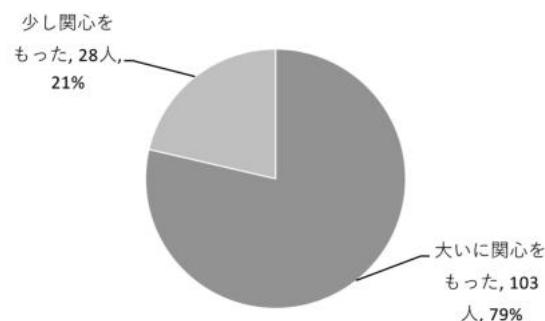


図5 研究内容への関心度。

また、職種別にみてみると表1の通りとなった。管理栄養士・栄養士の多くが関心を示しており、シンポジウムへの協力が期待される。（N=128）

表1 職種別にみた研究内容への関心度 N=128)

	大いに関心をもった	少し関心をもった	総計
保育士	27	7	34
管理栄養士・栄養士	19	3	22
保護者	13	1	14
幼稚園教諭	7	6	13
保護者（当事者の）	6	1	7
施設指導員	4	0	4
リハビリ	4	1	5
教員	0	4	4
県・市町村職員	3	0	3
調理師・調理員	3	2	5
社会福祉士・介護福祉士	3	1	4
大学教員・職員	2	0	2
保健師・看護師	2	0	2
その他	7	2	9
総計	100	28	128 (人)

⑤ 発達障害児の食支援に関する理解度（N=131）

シンポジウムを通じた発達障害児の食支援への理解度について回答を求めた。回答は「大変深まった」「少し深まった」「あまり理解できなかつた」「理解できなかつた」の選択肢とした。その結果、100%の参加者が「理解が深まった」と回答していた。

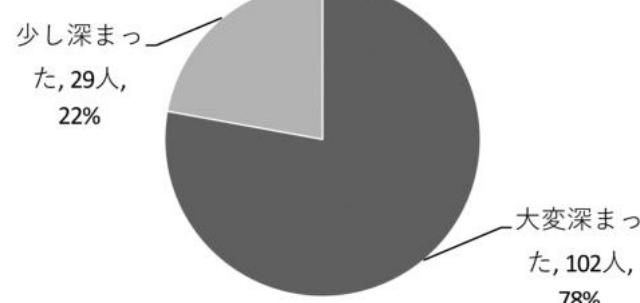
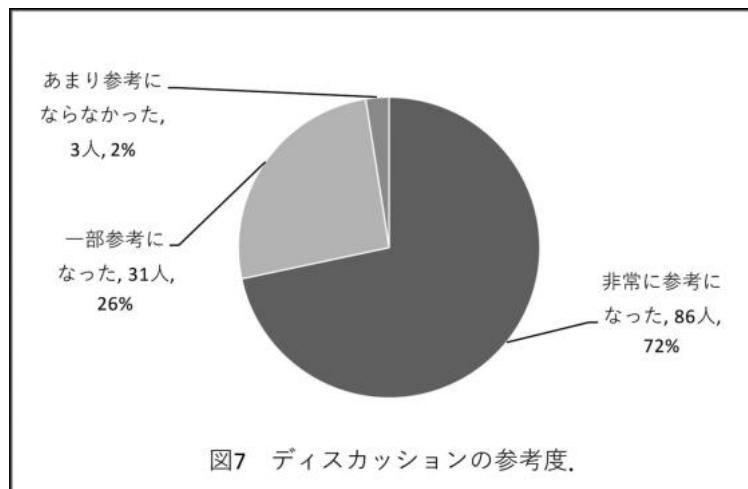


図6 発達障害児の食支援に関する理解度。

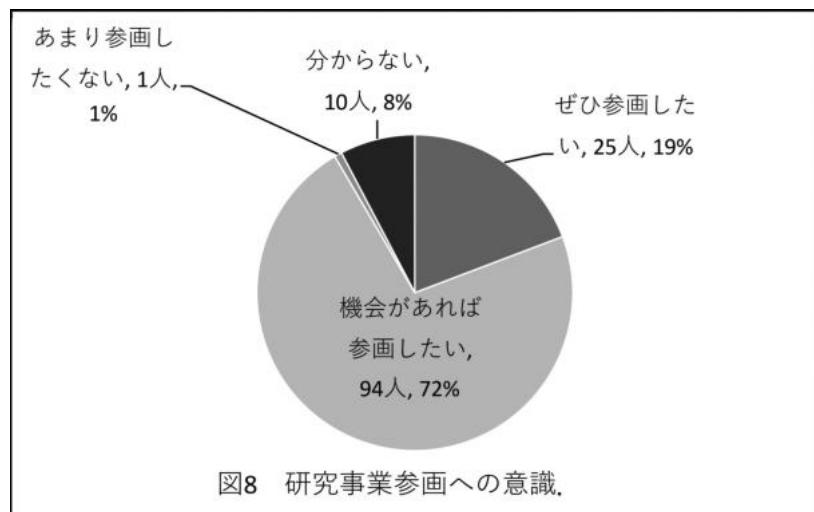
⑥ ディスカッションの内容の参考度 (N=120)

シンポジウムのディスカッションの内容が今後の支援にどの程度参考になったか回答を求めた。「非常に参考になった」「一部参考になった」「あまり参考にならなかった」「参考にならなかった」の4つの選択肢とした。その結果、26%が「一部参考になった」と回答しており、今回のシンポジウムの申込にて事前に質問を寄せ、それについてQ&A方式で回答したことで、ディスカッションの回答が実際の場面で役立つスキルとして捉えられたと推測できる。

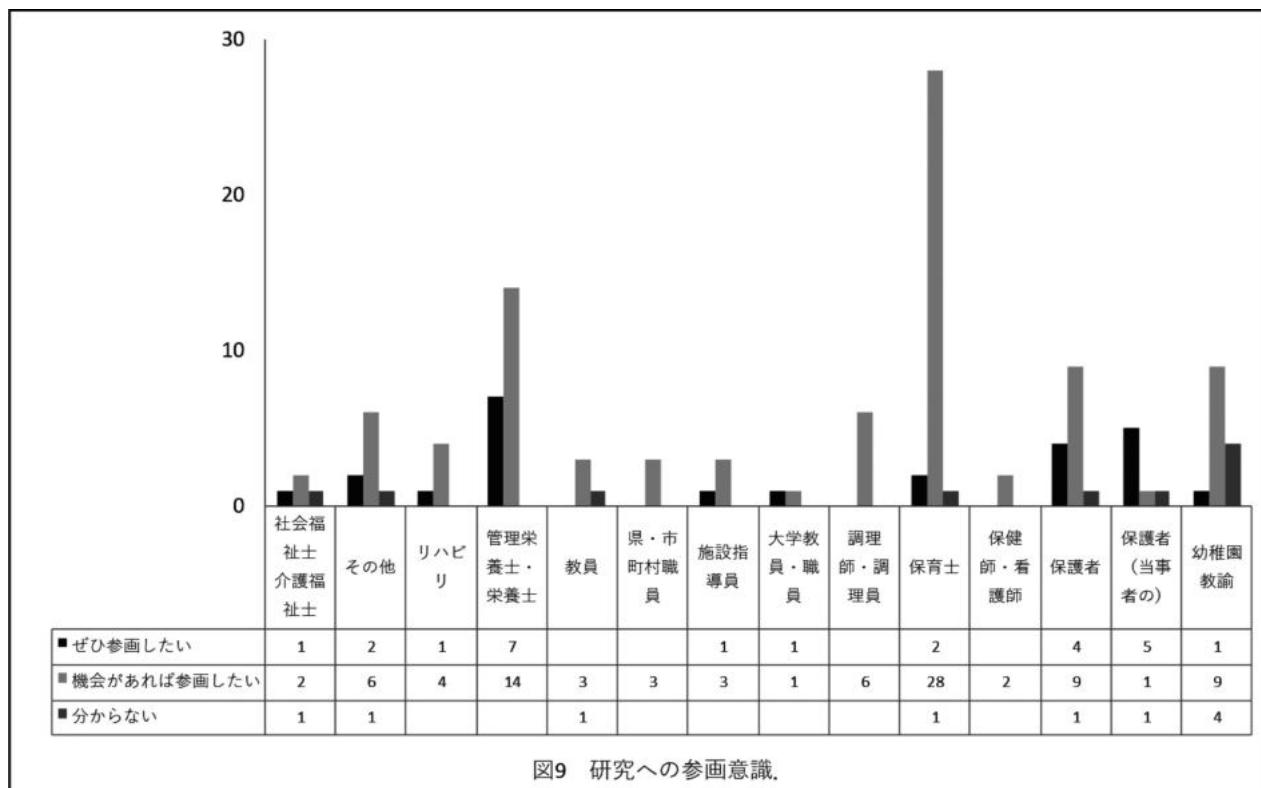


⑦ 「発達障害児の二次障害予防支援（あいあい）」への参画意識 (N=130)

本学の研究プランディング事業への参画に対する意識を「ぜひ参画したい」「機会があれば参画したい」「あまり参画たくない」「全く参画たくない」「分からぬ」の選択肢から回答してもらった。その結果、大多数が参画したいと回答していた。しかし、「分からぬ」と10名の回答があったことから、研究概要の説明をより明確に伝えることが必要と思われた。



研究参画への意識を職種別に表記した（図9、N=127）。おそらく保護者は我が子の支援を含めた希望に近い意識と思われる。一方、保育士や管理栄養士・栄養士に関しては今回のシンポジウムが実践的な講義であったこと、また現場における職員の困り感が現れた結果であると推測できる。



⑧ 自由記述

自由記述については感想、要望、質問等のいくつかの項目に分類して列挙する。なお、個人情報に関わる箇所、あるいは表記に誤りがあった箇所については加筆・修正した。

【感想・提案等】

- 食事支援についてはとても参考になりました。事例についてはもっとたくさん知りたいと思いました。
- 偏食、食支援は子どもの発達支援として大変重要であると思います。具体的でわかりやすい内容、大変参考になりました。
- 藤井先生へ 小1男子の母です。白ご飯、肉魚ばかりを食べます。お話を伺い、間食のカロリーが多いことと野菜にいきつくまでに満腹になっているのだろうと感じました。野菜はたまに食べてもふた口目につながる事が少ないです。小松菜の試食を食べてみて、お浸しの固さでは息子には固いと感じました。煮る方法で挑戦してみようと思います。
- 園に帰ってから、個々の食事理解、支援を深めていきたいと思った。
- 自分自身の勉強不足で認知できていなかったので、これから資料やHPを見せて頂き、理解を深めたいと思います。本日はありがとうございました。
- 参加させて頂き、とても参考になりました。家族として具体的な取り組みが分かり、出来る事は支援していきたいと思いました。
- とても参考になりました。また参加できる事があれば参加したいです。
- シンポジウムの内容や今までの事例やその対応などをお聞きして、私たちが取り組んでい

る内容が間違っていたと安心させてもらいました。これからは保護者への対応が重視される現場です。ぜひ、県からのサポートで市からの流れをもっと深められるよう人材の有無を拡散して頂きたいと願っています。現場からもお願いをしていく所存ですが。

- 色々な障害がある中で食事に関しては、「みんな一緒にやなければ」という言葉に“はっ”とさせられました。子どもだけではなく、保護者に対する支援をして頂きたいと思います。当たり前が当たり前ではない時代だからこそ、私も考えて対応、接していくみたいです。
- すごく興味深い取り組みです。一般の人にも分かりやすく「こういう取り組みをしているんだな」と伝わればいいですよね。よい取り組みなので。
- 卒業生として短大でとてもよい活動が始まっています。本日は試食もでき、とてもよい時間となりました。ありがとうございました。
- 年少で入園した時は、白ごはんしか食べなかつたのが、年中で改善してきて喜んでいます。しかし、家では、特定のものしか食べず悩んでおります。今日から家で、講演で聞いたことを参考に頑張りたいと思います。
- 困っている子どもたち、どう支えていけばよいか悩んでいる保護者の力に、これからも温かく道筋を照らしてあげて欲しいと思いました。どのお子さんも、保護者の方も楽しく気持ちよく生活できますように。
- とても勉強になりました。ありがとうございました。
- ブランディング事業など詳しいことは知りませんでした。発達障害児の二次障害予防支援（あいあい）についても幼稚園でも気になる子が増えて来ています。何か一緒に取り組めたら良いなあと思いました。参加の機会を頂きありがとうございました。準備等、お疲れ様です。
- 子ども理解だけでなく、保護者との密な連携がとても大切であると感じました。
- 限られた時間でしたが、たくさんのこと聞くことができた。とても勉強になった。私自身が調理をするわけではないが、保育者としてできることもたくさんあり、月曜から再度頑張っていきたいと思った。遠方から来てよかったです。藤井先生ありがとうございました。
- 藤井先生の取り組みはHP等で参考にさせて頂いていましたが、今日のように実際の食べ物で体験させていただいたことで深まりました。準備して頂いたスタッフの皆様ありがとうございました。大変参考になりました。藤井先生のきめ細やかな対応に感動しました。
- 勉強になりました。ありがとうございました。
- 長く小学校で発達障害児とその周辺の子どもたちの支援を行っておりましたが、小学校入学の時にすでに二次障害と思われる不適応行動を表出している子どもが少なからずいるので、偏食をはじめ幼児期の対応を多角的にみんなで考えていくべきだと思います。本日はありがとうございました。
- ありがとうございました。
- レジュメや拝聴内容等、同じ悩みを持つ保護者の皆さんとシェアさせて頂きます。貴重なシンポジウムありがとうございました。
- 具体的で分かりやすくとてもよかったです。試食する機会があり、子どもの立場に立つことが出来て、より分かりやすかったです。家庭でも可能な限り工夫して取り組んでいきたいと思つ

た。

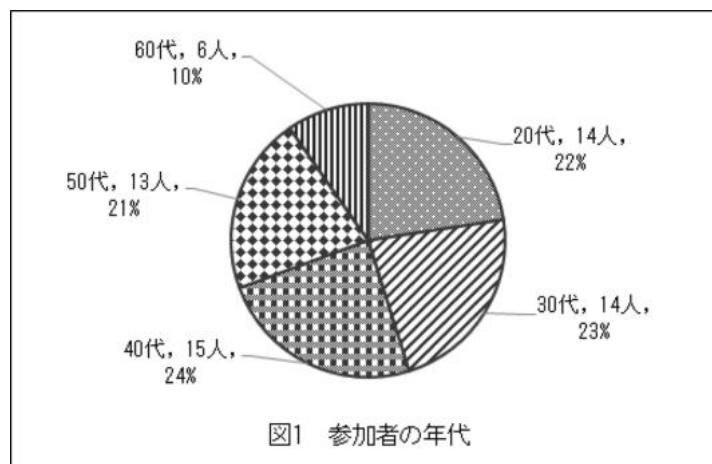
- あまり食事への支援（偏食）に関する話は聞けないので大変勉強になりました。偏食で悩まれている方もたくさんいると今回参加して分かりました。園でも親同士話してもやはり解決法が見つからず、ずっとだらだらと過ごしていた毎日でしたが、料理法も工夫して少しでも食べられるものが増えればと思いました。また、こういったシンポジウムがあったら参加したいです。
- とても勉強になりました。また、ぜひお願いしたいと思いました。

3) 発達障害児の二次障害予防にむけた縦と横の連携（2019シンポジウム）

アンケートは参加者全員に配布され、63名から回答があった。回収率は約70%であった。以下に質問項目毎に集計した。

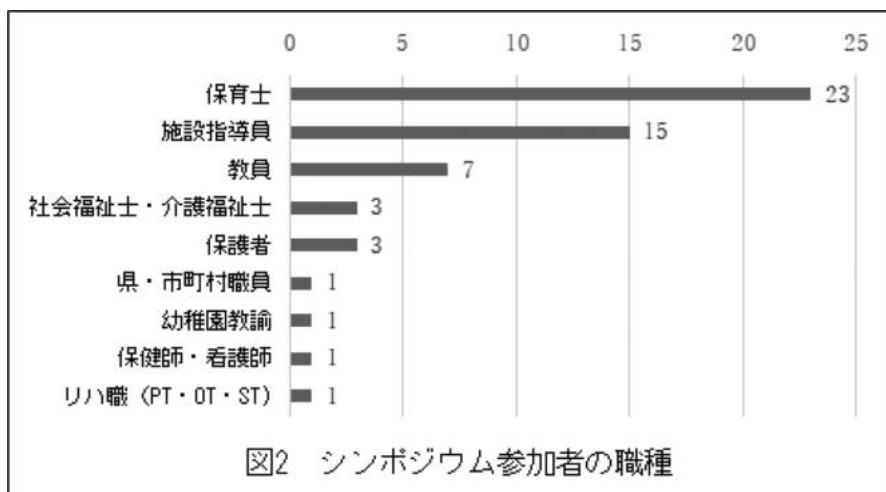
- ① 年齢をお答えください（63名中62名が回答）。

参加者の年代は、20代～60代まで幅広く参加していた。その中でも40代が最も多く参加している（約24%）。



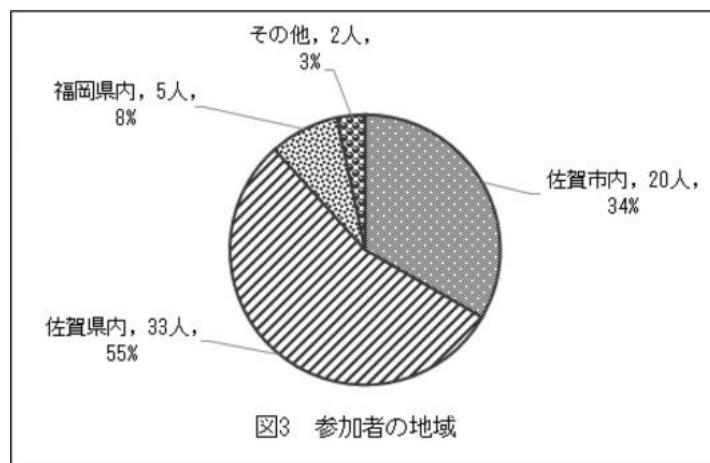
- ② 一般参加者の方は職業を教えてください（63名中55名が回答）

シンポジウム参加者の職種は、図2のとおりである。保育士、施設指導員で回答者の約7割を占めている。



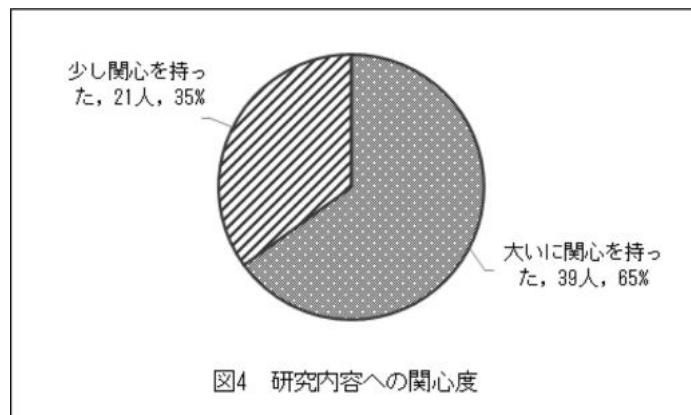
③ 本日はどちらから参加されましたか (63名中60名が回答)

回答者の多くは佐賀市内あるいは佐賀県内からの参加であった。その他には長崎県からの参加者があった。



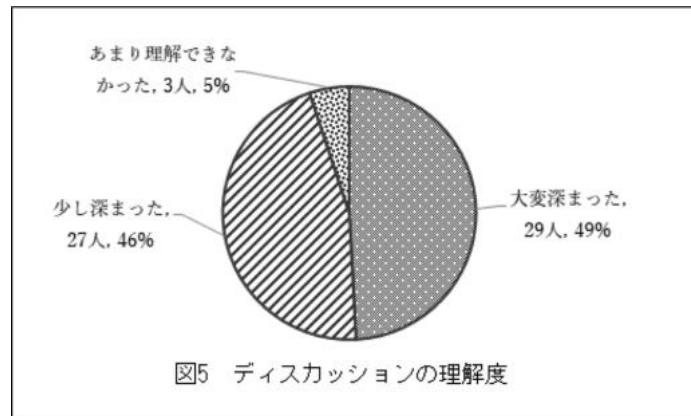
④ 本事業の研究内容 (研究ABCD) に興味・関心を持たれましたか? (63名中60名が回答)

本事業への関心度を尋ねたところ、多くの方が関心を持っていることを確認した。



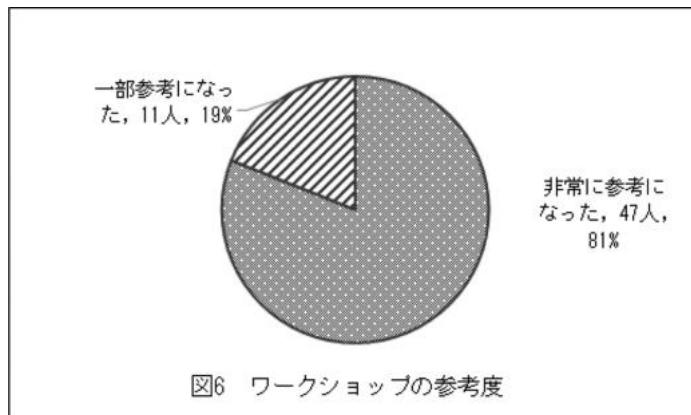
⑤ ディスカッションを聞き、発達障害児の現在の課題についての理解は深まりましたか (63名中59名が回答)

ディスカッションを通じた理解の深まりを尋ねた。回答者の約95%は理解が深まったと回答した。



⑥ ワークショップの内容は、あなたにとって参考になりましたか（63名中58名が回答）

ワークショップの内容が参加者にとって参考になったか尋ねた。回答者のほとんどのが「参考になった」と回答した。



⑦ 自由記述

- 悩みを共有できたこと。とりあえずのとっかかりをつかむことができたこと。
- 現状や課題を整理できた。獲得するスキルが一貫していることを感じた。様々な分野の方の話が聞けて良かった。
- 価値観の共有の部分が良かった
- 他のプロセスに関わってある方のお話を直接おうかがいする事ができ、今後何を取り組んだらよいか考え、参考にすることがきました。
- 違った視点で物事を考えることができた
- 枠をこえた連携が本当に必要だと思った
- 縦の連携の大切さがわかる機会になりました。皆さんの様々な意見がとても参考になりました。
- 発達障害の方を野放しにしてない支援プラス、その人らしい生活を送っていくことが大事。周囲の理解や相談する機関が必要だと思いました。
- 様々な分野の指導者の方と情報共有できたがことが、本当によかったです。有意気でした。ありがとうございました。
- ワークテーブルに添って実際項目別に出していくと課題がわかってくるので、今後の仕事に活かせると思いました。学ぶ機会があり、大変参考になりました。
- 価値観の共有、主観の共有、情報の共有が人生を通して必要。その時期に必要なスキルを明確にして、そのため求められるその時のアクションがすぐにとれる、とてもらえるような能力（施設スタッフとして）関係づくりや発想・知識を身に着けたい。
- トータル的に支援していくことの難しさは改めて感じたが、やはりやりがいがあり、子どもたちのステップアップに関われることを嬉しく思いました。問題点や疑問点をいろいろな人たちと共有できてとてもよかったです。ありがとうございました。
- ワークショップで、いろいろな立場の方の意見を伺い、とてもリアルに具体的な支援がわかりました。またこの企画楽しみにしています。

- 自分の得意でない分野を考える機会。多様な意見を聴けた
- グループワークで色々な人と話を聞くと自分が考えていないことがたくさん出てきて参考になりました。
- 幼少だけでなく、大人へつながっていくことを考えていくこと。情報共有、交換は有意気と思いました
- 発達に障害を持つ子どもに対しての支援について、イロイロな示唆を得ることが出来た
- グループワークでいろいろな意見をきけて大変よかったです。
- 様々な方の意見を聞き共感する事や勉強になったことがたくさんあった。個別の対応や特別支援が必要な子の関わり方を改めて見直していかなければと思った。
- 色んな考え（経験を含め）を知れて自分も参考にし、使っていきたいと思う。ワークショップの練習を増やしてほしい。
- 誰が「主語」になり困っているのか、考えなければならないと思った。今、子どもたちにできることを職員間でも話し合いたい。
- 自分たちの立場として何を支援したり、専門知識を学ぶことが大切かよく理解する事ができました。専門機関をどう利用するかは、日々のコミュニケーションだと感じた。
- 無意識に思っていた偏見があることに気づくことが出来た。“誰が”困っているのかと冷静な視点やいろんな人との共通認識が大事だと感じた。
- 皆さんの意見を聞いて、自分が思いつかないことが知れてよかったです。また、皆さんの熱意を感じ、良い刺激も受けることができた。
- 支援者の立場以外の考えを知ることが出来た（教育、看護、保育）
- 様々な職種の方と一つのことを話し合い、横の軸で共通していることがわかり、大変勉強になった。
- いろいろな施設、学校等の方々との学び（つながりのある）が得られた事。今までと違った研修体系だったと思います。事業の継続を希望するのですが・・・今後ともよろしくお願ひ致します。
- ワークショップで、それぞれ考え、シェアすることができ、支援の仕方や課題を再確認できてよかったです。
- 他分野の先生とお話しする機会（特に幼保）が少ないため、今日は特に貴重な経験になりました。
- 様々な職種の人と関わったり、考えが聞けて勉強になりました。
- 時間は短く、意見をまとめるのが難しいように感じたが、一人一人が違った言葉で説明されるが、目指すべき形や目標などは一致しており、安心して意見を述べることが出来た
- 子どもの受容、周囲のものの共有化、つながりが大切
- 様々な職業の方との話が出来て、参考になりました。現在、悩まれている方の話も聞けて良かったです。
- 現場の人間や保育者がもっと気軽に相談できる機関なのか？広報の問題なのか？私の不勉強の問題なのか？悩みが深くなかった。
- グループで一緒になった保育の方の話が聞けたのが良かった。

- 昨年の中頃に放デイで勤務し始めました。また放デイ自身立ち上がったばかりで、保護者様の困りごとについて、情報を知りたいと思いました。
- 様々な資格を持った参加者がいて、イロイロな意見が聞けた。
- 自分自身の考えだけでなく、他の人の意見を聞くことで、気づかされることもあり、話せば話すほどいろいろと意見が出てきてよかったです。
- 佐賀県内の各分野の現状を知り、今後へ向けての方向性を確認する事ができました。
- ワークショップメンバーからのいろいろな意見・考え方などで、知ることが出来た。我が子(ADHD)の子の少し先の将来像が見通すことができた。
- それぞれの職種について現状やこれからのこと考えが聞くことが出来てとても勉強になりました。
- 幼～社会人 幅広く、将来を見すえ、考えることができた
- 色々な現場の方々と話すことができ、年代によっての状況、サポートを知ることが出来ました。
- 他職種の方との話が出来て、たくさん学ぶことができました。ありがとうございました。
- 環境の違う職種からの意見が聞けて、大変勉強になりました。

⑧ 今回の「発達障害児の二次障害予防支援（あいあい）」についてのご意見・ご感想、プログラムに対するご質問・改善点

- グループで話す時間で、考えが深まりました。ありがとうございました。
- “二次障害予防”とは具体的に何を指すのかをもう少し具体的にしていただけるとよかったです。
- 現在保護者会開催を検討していて、保護者のストレス軽減の発表を伺い、ぜひマッサージをしていただきたいと思いました。また連絡させてください。よろしくお願ひ致します。
- 佐賀県では5歳児健診を推進する計画はありますか。幼稚園、保育園で集団の中で生じる困り感を保護者が正しく知るために必要だと考えております。虐待や小学校での早期支援にもつながります。ぜひご検討ください。
- 研究A調査された個別の支援計画が幼児期（放デイ利用前）を指しているとわからなかったこと。教育・福祉供、支援計画は保護者と共有する事になっているので、それが“できない”という解答は、事業者側の責任によるものが大きいと考えます。個別支援計画の開発期待しています。作成のためのアセスメントはどのようにされるのでしょうか。何か標準化されていたものなのでしょうか？
- 今日の資料のうち、社会資源についてまとめられた図表がとても参考になりました。データとして佐賀県のHPでは探せなかったのですが、いただけないでしょうか・・・。
- ディスカッションを行いつつも、互いに述べることが出来て安心でした。違う意見でも良いんだという自分自身（自己認知）出来ました。
- 具体的な事例・・・対応方法などを知りました。
- 今後も様々な職業の方とのお話が出来たらよいと思います。実例なども聞きたかったです。
- 中学生の発達障害をもつ生徒や保護者の相談にものっていただけるのでしょうか？異校種の

方（立場の違う方）たちとの研修が今後もあってほしい。

- ▶ ワークショップは楽しかったですが、時間の都合上、所々で“あと1分です”とかの声で、グループ内の意見が聞こえづらかったです。シンポジウム全体に関する事では、資料等がわかりやすかったです。
- ▶ 職場（現場での）関わり方も考えさせられた。ぜひ、また参加したいです。ありがとうございました。
- ▶ 難しい事も多々ありましたが、楽しく参加できました。
- ▶ ディスカッションは必要ですか？前で話されている方と聞いている方（参加者）の温度差をとても感じました。それよりも、質疑応答の時間を設けられた方が理解も深まったように思います。
- ▶ ペアレントプログラム講師養成のためのアドバンス講座への参加資格、期間、時期など、知りたい。佐賀県のホームページを調べてみます。